
招かれざる客

輝度音須

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

招かれざる客

【Nコード】

N1756X

【作者名】

輝度音須

【あらすじ】

若い好奇心から凄絶な過去を背負うことになってしまった男と、彼を支える友。その過去を執拗に探る老人。そしてそれら全てを呑み込む影。米国を舞台に、過去に決着をつける戦いが静かに幕を開ける。

序章

1995年7月14日

街道を2人の青年が走っている。先頭に行くのは彫りの深い顔立ちをした、黒髪の17、8歳の男だった。

彼は振り返って呼びかけた。

「早く来いよ！」

「少しくらい待ってもいいだろ、バート！」

追走する薄い茶髪の男が言い返すと、バートはニヤリと笑ってそのまま右折。

「おい、待てって!!」

慌てて彼も右の道に入った。

道を抜けたバートは、目の前の林道を駆け抜け、丘の上で止まった。前方に白煙が立ち上っている。

背後で足音がした。

「ようやく来たか、ネディ？」

ネディは息を切らして、死にそうな顔でバートとその向こうの白煙を見やった。

「あれか…？おま…お前の見せたいものって…」

ゼエゼエしながら問いかける。

「正解。昨夜の地震、隕石が原因とみた」

「…で？」

「立証しようと思ってな。ついでに暇そうなお前さんを連れて来た次第だ」

「サミーを連れて来ればいいだろ」

「サムが怒るぞ、その呼び方。あいつは俺らと違って勉学に精を出してるんで余裕が無い」

「あっそ…」

「そろそろ呼吸も落ち着いたな？行くぞ」

「はいはい……」

ネディは諦め顔でバートを追った。

「こりや凄い……」

バートたちが見たのは、横倒しになっている何かの機体だった。

「軍の輸送ヘリじゃないかな？それも多分、相当デカイ部類の」

「我が隕石説は撤回するでしょう」

「そうした方がいいだろうね……って、おい！」

バートはひしゃげたドアの隙間から機内を覗き込んでいた。

「おいやめとけて！」

「大丈夫だって」

「何があるか分からないだろうが！？帰って警察に知らせた方がいいって！」

ネディの言葉を聞き流しつつ、更に奥を見ようと身を乗り出した。と、

「逃げるぞバート！野犬だ！」

ネディが怒鳴り、バートを引っ張り出そうとした。が、バランスを崩し、諸共機内に転落する。

バートが身を起こしながら尋ねる。

「な、ナンダッテー！？」

「ネタやってる場合か！野犬の群れがいたんだよっ！とつと逃げろぞ」

そう言つて慎重に外に出て行くネディに続く。見れば、周囲の茂みには確かに黄色い目がそこかしこに光っている。

「3で走るぞ。1…2…」

「3！」

そのまま2人は風のように走り去っていった。

だが彼らは逃げ切れただけではない。むしろ、非情な運命の糸

に絡め取られていたのだ。

序章（後書き）

感想・批評ご自由に

第二章

2004年6月30日

黒い中型のワゴン車が、かろうじて地ならしされている程度の砂利道をノンビリと走っていた。長めの金髪をオールバックにした20代後半の男が、くわえタバコで運転している。助手席にはギターケース。

唐突に、合衆国の国歌が鳴り響く。男は上着のポケットから携帯電話を取り出し、耳に押し当てた。

「はい…お前か…ああ、分かっている…えっ？ああ、今…」

一瞬カーナビに視線を落とす。

「後5、6分で着く。土産持ってきたよ。…例のモノ？持ってきた持ってきた。相変わらず心配性だねえ…はいはい、もう分かったから切るよ」

携帯電話をポケットに戻し、森の一本道を抜け、草原に囲まれた道を走る。既に太陽の下半分は沈んでおり、西の空が茜色に染まっていた。

5分後。ワゴン車は速度を落とし、優に大型車3台が駐車できるくらいに巨大な車庫の右端に停まった。運転席の男はエンジンを切ると、ギターケースと黒っぽいザックを手に車から降りた。車庫から出て、両開きの扉を軽く叩く。

「どちら様で？」

「開けてくれ、サムだ」

サムが答えると、カチャカチャという金属音の後、扉が開いた。そこに立っていたのは、疲れた顔をした男だった。背丈は185センチ程で、黒髪を刈り込んでいる。彼もまたサムと同じく20代後半だ。

「来たか」

「久し振り、バート」

「元氣そうで何よりだ」

「バートは疲れてるみたいだね、大丈夫？」

「どうにか。ま、とりあえず上がってくれ」

「じゃ、遠慮無く」

サムが居間に行くのを見、バートは扉を閉め、二重に施錠した。そして上下2本の門を掛けた上に、南京錠かんぬきを掛けて居間に向かう。

「バート、これ土産」

そう言つてサムはザックに入っていた焦げ茶色の木箱と、銀白色の金属製の箱を投げ渡した。

「金属のほうは割りとどうでもいいけど、もう一方のは丁寧に扱つたほうがいいよ」

「投げといてよく言うな」

バートは苦笑しつつ、手近なテーブルに2つの箱を置き、フタを取った。木箱の中は3つに仕切られており、薬莢と弾頭と雷管が詰まっている。金属箱のほうは種類毎に小分けに袋詰めされた大量の銃ガン火薬が入っていた。

「既製品で良かったんだが？」

「せっかくガンスミスの資格取つたんだから横着するなつての。なまるよ？」

「面倒なんだぞ、意外と。まあいいけど。…時にサム」

「ん？」

「実は今夜はもう一人客が来るんだ」

「んなら俺は2階に引つ込んでるよ」

「いや、ここにいてくれ。それと、武器を手放すな」

意味深長な言葉を聞いて、サムは目を吊り上げる。

「そういつた手合いの客なん？」

「察してくれ。7、8時には来る。一応念の為だから、これ見よがしに持つな」

「了解した」

数時間後

「遅い、遅過ぎる」

「もう１１時近いぜ。来なかった方が悪いってことで、諦めて寝ない？」

「うーん、そうするか……」

２人が階上に行こうと立ち上がったその時、トントンというノックの音がした。

「おいでなすったか」

「えらく遅いお着きで」

２人共皮肉気に呟きながら、玄関へ向かう。鍵等を外し扉を開けると、黒いスニーカーを提げた中肉中背の老人に片足踏み込んだ外見の男が立っていた。

「こんばんは、遅かったですね」

「うむ。車のタイヤが途中でパンクしてしまい、歩いてきたのでな」
「そうスカ」

壁に寄り掛かったサムがボソつと言うのを聞き、男はサムをギロリと睨む。

「誰だね？」

「彼は僕の友達でして……」

「バーソロミュー君は黙っておれ。その君に尋ねておる」

「…サミュエル」リーチ

サムは腕組みして、不機嫌そうに答えた。そして男が二の句を継げぬ内に続けて言った。

「あんたは？」

「私は生物学者のベデット教授だ。名前くらいは聞いたことがあるだろう？」

「知らないね」

「ほう。よっぽど育ちが悪いとみえる」

「とにかく上がって下さい。話は中で。サム、居間の箱を僕の部屋

に運んどいてくれ。頼む」

後の展開を危惧したバートはそんな消化弾を撃ち、2人を一旦引き離すことに成功した。当然、一時的でしかないが。

「（なんだろう、この気まずい空気は）」

肘掛け椅子で踏ん反り返っているベデットと、バートの横でベデットと向き合うように座っているサム。互いに警戒し合っているのが丸分かりだ。

「えーとりあえず今夜の御用件をお伺いしたいのですが」

「俺も聞きたいねえ。大先生のお話を」

「（サム、後生だから波風立てないでくれ）」

心の声は本人には伝わらない。ベデットは空咳の後、問い掛けた。

「君たちは『J - c y s（ジェイシス）』を知っているね？」

バートとサムは揃って固まった。

「無言は肯定ということかな？まあ、知らないはずがないけどね」
2人は沈黙している。

「J - c y sは記録上最強の生物兵器であり、各国の生物学者が血眼になってサンプルを探している。彼らは高い知能と超絶的な生命力を持ち、身体能力もオリンピック選手並みに高い。私も彼らを追い続けてきた者の一人だ。そして5日前、幸運にも私は某軍事資料を入手した。それによれば、1995年7月13日にJ - c y sの試作型20体に乗せた大型輸送ヘリがノースカロライナ州からミズーリ州の研究施設へ向かう途中、何らかの原因で墜落したという。

場所はテネシー州のウェルズという小さな集落、つまり君たちの生まれ故郷だ」

バートは熱演するベデットに若干引きながらも、彼が何を求めているのかなんとなく分かってきていた。サムはというと、殺気立った目でベデットを睨んでいたが、やがて口を開いた。

「要するにあんたは奴らのことを俺らに話せと言いたいんだろ？実体験してる俺らに」

「君がいるのは予期していなかったが、まあそういうことだ。誰々

がどうなったというのは正直どうでもいい。J・c・y・sのことを聞かせて欲しい」

「断る」

サムは鋭く言い放った。

「君たちがあの数日間に地獄を見たのはこちらでも理解している。しかし」

「帰れ」

更に言い募ろうとするベッドに、サムは念の為隠し持っておいた護身用拳銃を向け、そう冷たく言った。ベッドはバートを見て何か言いかけたが、バートはそれを無視して言った。

「お引き取り下さい。僕らはもう関わりたくないんです。J・c・y・sについて話すべきことはひとつだけです。決して関わってはいけない、ということだけ。それ以上は、ご容赦下さい」

釣り上げた魚に逃げられたような表情になっているベッドの背中に銃口を押し付け、サムは彼を玄関まで誘導した。バートが施錠を解いて扉を開けるのを見計らって、ベッドを夜闇に放り出す。

「待ちなさい！こんな夜更けに老人を野外に放置するのか、君たちは！？」

「確かに老人は敬うべきだが老害は死ねばいい。そして野外放置プレイの趣味は俺らには無い。帰れ。もう来んな」

サムの殺意に満ちた言葉と不気味な存在感のある銃口に気押され、ベッドは悪態をつきながら歩いて行った。バートは無言で扉を閉め、施錠し、サムを伴って居間に戻った。

「まったく、迷惑な奴だったよ……」

ソファーに寝転がったサムが呻く。拳銃は無造作にテーブルに置いている。

「あまり古傷を弄らないでほしかったんだが……」

「弄るところか塩塗りこまれたような気がするけどね。ってか、俺がいて良かったね？」

「ああ、そうだな」

「バートだけなら押し切られてたよね？」

「だろうな。正直さっきの敵意丸出しのお前が普段とキャラ違い過ぎて怖かったですはい」

「感謝せよ」

「五体投地するわ」

「冷やし土下座で」

「勘弁して下さい……それはそうと」

「うん？」

「お前はまた、マイナーなの仕入れたんだな」

「何が？」

顔を上げて聞き返すサムに、テーブルの上の拳銃を指し示す。

「S & W（スミス アンド ウェッソン）のM167か。俺ガンマニアだけど初めて実物見たわ。使い勝手は？」

「護身用としては申し分無いよ」

「他に何か無いのか？」

「あるよ。車内に置きっぱだけど」

「どんなん？」

「我が国最強のリボルバー、スタームルガー・スーパーレッドホークアラスカン・44マグナム弾ver.だ！」

「・480ルガー弾仕様の方が強いはずだが…実用的じゃないからか？」

微妙にテンションが上がっていたサムはその言葉に動きを止めた。

「近所の銃砲店でタッチの差で買い損ねたんだよ……」

「それにまあ実際米国最強はS & WのM500だしな」

「予想外に高くて買えなかったんだよ……言わんとして……」

死んだ目をしたサムを見やり、バートはクツクツと含み笑いを漏らした。

「悪い悪い。んじゃ、階上行こうか」

「はぐらかされたような気がするんですが」

「いいからいいから」

バートは笑顔でサムの背を押し、2階へ上がって行った。そのまま寝室に押し込み、穏やかに声を掛ける。

「それじゃ、恒例のお楽しみといきますか」

サムがベッドに身を預けて微苦笑を浮かべたのに呼応して、バートも上着を脱ぎ悪戯っぽい微笑を浮かべる。そして言った。

「前は頑張り過ぎてふたりとも疲労で意識失ったからな、今回はそうはいかんよ」

そして頭上の蛍光灯が消え、残る明りはひとつだけになった。

第二章（後書き）

ウチの主人公は某悪魔の実の能力者とは何の関係もありません。
そして彼の友人は某ウィンチェスター君とは（ry

感想・批評・意見ご自由に

第三章

「どっせえーいっ！」

操作者の気合と共に、画面内の警官風の男が襲い来る腐った犬を蹴り飛ばす。が、その後ろから飛び出してきた皮膚の赤黒い異様な風貌の人型によつて首を刈り取られ、あえなく死亡した。

「これ、無理だろ……」

サムはコントローラーを握ったまま、「You Are Dead」と表示されている画面を呆然と見て呟いた。

「いや、可能だ」

その横で寝転がって観戦していたバートが軽く言う。机に置いてあるディスクケースの外側には「自作版生物災害・弐」と書かれた（もちろん英語でだよ？日本語じゃないよ）ラベルシートが張られていた。これは、某サバイバルホラーゲームを参考にバートが己の技能とパソコンを限界まで駆使して創り出したビデオゲームソフト「自作版生物災害」シリーズの第二弾である。立ち塞がる敵を蹴散らしつつ町の外へ脱出を計る、というありがちな内容だが、マップが存外に広い上にクリーチャーの種類が豊富でかつ個体数が異様に多い為、根本的に高難易度なのだ。それに比例して武器弾薬は山のように入手でき、キャラは体術でも戦うことができる。しかしそれでも滅茶苦茶難しいことに変わりはなく、サムは1時間で既に15、6回は死んでいる。

「なんでイージーでこんなムズいんだよ!？」

「お前が下手なんだよ。第一弾の時もクリアに半年もかかった？ 前回は寝落ちで終わったが、今回はそうはいかん……終わるまでリアルで寝かさんからな」

「聞きようによつてはアダルトなセリフですね、バックにバラの花が浮かぶ系の」

「やめんかキモいわ……ってかホラ、続けて」

「はいはい」

再挑戦するも、開始直後に歩く死者の群れに圧殺される。

「んじゃあ今夜は1ステージ突破するまで寝ないってことで。そこを最低ラインにしよう」

「それつまりどこまでだ？」

「敵100体以上撃破後に警察署エントランスに入れば1ステージ終了。そこでセーブできる」

「そこまでハンドガンとナイフでいけと？」

「リアルだろ？」

「追求しすぎだつての！」

「いやいや現実的に考えてみろよ。武装してるだけありがたいじゃないか」

「武装少ないよ……てかこのハンドガン、弾が出ないことあるぞ！？」

「仕様。100分の1の確率で発射不良が起きる。おまけに言つとくと、排莢不良もたまにあるから」

「お前な……」

サムの恨めしそうな顔に冷たい微笑を返し、バートは立ち上がってドアの方へ歩いて行った。

「どこ行くん？」

「お仕事。ま、頑張んな」

「うるせー！」

怒号を聞き流し、部屋を出た。サムが持ってきた箱を小脇に抱えている。向かうは、居間。から伸びる通路の先の小部屋である。この部屋はバートが趣味と実益とを兼ねた仕事をする為だけに造られた。仕事机に箱の中身を適当に広げ、椅子に腰を下ろす。

「あれこれやってる内にもう25時か」

呟き、作業に取り掛かった。

ボタン、タン、タン、タン、タタタン、タン、タン、ガチャ

「ノックしろよ」

「ごめんねー。ハンドローディングの真っ最中ですか」

射撃後に必ず残る（最近はそうでもないけど）空薬莢に雷管・発射薬・弾頭を詰め直すことをリローディングと言い、また自分で簡単な工具を用いて手作業でこの作業をすることをハンドローディングという。

「ああ、弾薬代がかさむからな」

実際、『ライフル実包の値段の半分は薬莢代』と言われている。

「なんか食べるもの無い？」

「なんやかんやで晩飯抜いたっけか。うゝん、冷蔵庫の中のもの好きに食ってくれ」

「はいよ」

サムがキッチンへ消えるのを見届け、作業再開する。ちなみにこの男が製作しているのは強装弾^{マグナム}——薬莢の寸法をそのままに、火薬量を増やしたり、より強力な火薬を使ったりして威力を上げた実包

——である。これは一歩間違えると、射撃時に銃身を破壊する結果を招く。それ故、合衆国の業界による研究所「SAAMI」の規格で、「安全範囲」を定めている。俗にその規格内のものを^{プラス}+P弾、規格外のをホットロード（またはオーバーロード）[＝]カートリッジという。バートは一応は規格内——今回に限って言えば通常の110%の+P弾——を、暇でかつ気の向いた時or依頼を受けて造る。

普段は正真正銘の引きこもりだが、仕事（半分くらい趣味）はきちっとやる人間なのだった。

~~~~~  
~~~~~

炎上する家屋、地に伏す人々、そして土気色の怪物たち。両親の

部屋からはそれしか見えなかった。いかんせん窓が小さいのだが、外には本当にそれしか無いのではないか。そう直感的に思った。両親は教会にいますという本人たちからのメッセージ。それを見つけ、恐怖に震えながらも適当に荷物をまとめ、戸口の前で友を待つ。少しして、待ち侘びた友が飛び込んできた。顔面蒼白で。「逃げよう！」彼はそう言って、有無を言わず腕を掴む。「な、何が起きるの？それに親が教会につ」「だめだ！！」こちらの言葉を遮って彼は怒鳴った。そのまま腕を引き、森の方へと走り出した。

逃げて逃げて、町から2キロメートルほど離れた森の空き地で、2人はようやく立ち止まる。「ねえ、ボクたちどうなるの？」彼は答えない。「み、みんな、まだ町にいるんだよね…？ボクたちだけこんなトコに…」叫び出したい衝動を押さえつけ、なるべく冷静に話そうとした。「ねえ、」「俺たちは死なない…死ぬわけにはいかない」？死？という語を聞き、絶望的な恐怖で涙が零れる。声が出ない。震えが止まらず、思考が止まった。「大丈夫、大丈夫だ。とりあえずは俺がお前を守るよ」彼は静かな、しかし強い声で告げ、肩を抱いてくる。途端に、泣き声が漏れた。肩に顔を埋め、むせび泣いた。長い時間、ずっと、ずっと。

~~~~~

缶が落ちる音でサムは目を覚ました。意外と広いダイニングキッチンでうたた寝していたのだ。時刻は午前2時10分。身を起こすと、背に掛けられた毛布がハリリと床に落ちる。

「バートにや、助けられてはっかだな。昔からずっと」毛布を拾い上げ、しみじみと呟いた。

「さて、と。ゲームの続きやりますか。……ん？」

何気なく目を向けた窓の向こうで何かが動いた気がした。

「何だ……？」

ゆっくりと窓辺に近寄り、外の闇に目を凝らす。

「気のせいか……」

身を引き、ダイニングを後にする。だが警戒を怠らず、S & Wの拳銃を抜き、弾の装填状態と撃鉄の位置を確認した。暴発しないように1発少なく装填されている弾薬と、ハーフコック——倒れている撃鉄を少しだけ起こして指を離すと、そこで撃鉄が止まる。その状態では引き金を引いても撃鉄は動かない。撃つためには、改めて撃鉄をいっばいに起こす（＝フルコックする）必要がある——にしてある撃鉄を見、拳銃をベルトに挟み込んだ。そして居間のソファで泥のように寝ているバートに毛布を被せ、階段を音も無く駆け上がった。いった。

### 第三章（後書き）

ふたりの関係は好きなように邪推して貰って構いません。  
でもバートはまだ何もやってません。

感想・批評・意見ご自由に

## 第四章（前書き）

久々の投稿ですよ。

今回は今までに比べると若干長めです。

パソコンだと相変わらず短いですが。

でも各話さっくり読めるのが売りなので、別にいいや。

## 第四章

“上手い狩人”は技術に関してだけ言うものではない。いかに技術が高かろうと、本人が周囲から丸分かりでは意味が無い。己の存在をどれだけ隠せるか、どれだけ風景に溶け込めるかが重要なのである。獲物を狩る技術と、自身の存在感ないし気配を消す能力。その2つがあれば軍配は自分に上がる。逆に相手がそれらを持ち合わせていれば、その腕から逃れるのは至難の業となるであろう。それは例えるなら、タカとネズミほどの差があるだろうか。

深い森の中を1匹のネズミ——ベデットという手負いの老ネズミが走っていた。彼の左肩は大きく、骨が見えるほどに削がれ、右手の指も何本が無くなっている。そんな状態でも痛みが感じられないくらい、彼は焦っていた。その後方を複数の何かが追っている。一応四足歩行してはいるが、手が器用なようで木の上を移動しながら追うものもいた。

どれほど走っただろう。気合だけで進む彼の前方に明かりが見えた。何も考えられぬまま駆け寄り、扉を叩きまくる。助けを求め、必死に。

ドンドンドンドンドン……………

激しく扉を叩く音に、バートは飛び起きた。反射的に周囲を見回す。  
「誰だ？こんな時間に…」

自衛用に持ち歩いているグロック17自動拳銃を抜き、遊底を引いて薬室に初弾を送り込む。チェンバー銃口を下に向けて両手で持ち、体勢を低くして玄関へ素早く移動した。相変わらず音は止まない。止んだら止んだで逆に怖い。鍵と門を解除しつつ、声を掛ける。

「どちら様で？」

返ってきたのは悲鳴混じりの叫び。

「私だ！ベデットだ！！助けてくれ！！」

バートは無言で扉を内側に開いた。と同時に血塗れのベデットが転がり込んできた。そして更にその後ろから、何やら人型のモノが……パンッ

問答無用で放たれた弾丸はソレの腹部に当たった。はずなのだが……

「んな！？」

撥ね返ったのだ。弾は跳弾となり、すぐ横の壁にめり込む。敵は怯みもせずに突っ込んできた。勢いで押し負け、後ろに吹っ飛ばされる。

「ぐっ……」

後転して起き上がるとそこには、1体の異形が腰を落とした突撃体勢をとって立っていた。それはまるで、人間と爬虫類を掛け合わせたような姿だった。基本的にヒトの形をしているが、体には体毛の類が見当たらず、その代わりのように全身を土気色のウロコが覆っている。手足の指には鋭い爪。顔には薄い鼻梁と蛇のような口。切れ長の眼の奥で、細い瞳が光る。本来耳があるべき場所には小さな穴が開いていた。蛇で言うところのピットだろうか。

「お前は……！」

9年前の記憶が一気に脳裏に蘇<sup>よみがえ</sup>ってきた。間違いない。故郷を襲った化け物と同じ姿をしている。

「よくもっ！」

叫び、続けざまに引き金を絞る。けれど、いくら撃つても怯みもしない。どの箇所にも当たっても弾き返されるのである。

その内、弾が切れた。敵は笑うかのように口元を歪め、跳び掛かってきた。万事休すかと思ったその時、

バァ——ン！！

という物凄い音が後ろから聞こえ、熱い物体が左耳を掠めた。突き飛ばされたような衝撃によって、床に崩れ落ちる。顔を上げると、敵が仰向けに倒れていた。

「大丈夫か!？」

サムだった。近寄ってくるなり、バートの腕を掴んで引つ張り起こす。彼の右手にはS & WのM 6 1 7より大きい回転式拳銃が握られていた。

「レッドホーク、持ってきたのか……」

「助けられた第一声がそれかよ。手入れしようと思ってさ、これ」拳銃を示しながら、そう言う。

「とりあえず扉閉めよう。まだ外にいるっばいから」  
「だな」

言い終えた直後、地に伏していた敵が外に引きずり出された。扉の向こうに2体ほどがこちらの様子を伺っているのが見える。サムがレッドホークの撃鉄を起こして構えると、2つの顔は死角に消えた。2人は顔を見合わせ、バートがそろりそろりと近づいて扉を閉めて施錠するのを、サムが見守る形になった。

「で、どうするよ？」

食パンにバタークリームをこつてりと乗せたものをガツガツと頬張りながら、サムが誰にと言うでもなく言った。

「専門家の御意見を伺おう。教授の御意見を拝聴したいのですが」  
バートは慇懃無礼にベデットに話を振る。

「……………」

ベデットは身を震わせて閉口していた。応急処置した怪我を見、サムを無視してバートに目を向け、おずおずと口を開いた。

「私には……分からない。J - c y sは完全無欠にして最強最悪の生体兵器だ。軍隊でも呼べばよからう」

「無理だ。先程確認したが、回線を切断されたく固定電話が使えない。携帯電話も最低600メートルは移動しないと圏外になる」  
「んだな」

携帯電話のフリップを開いたサムも頷く。

「では、どうすれば……」

身を竦ませるベッドを見据え、バートは高らかに宣言する。

「戦おう。幸いにも食料は山のようにある。あと3ヶ月は籠城可能だ」

「大賛成」

「というわけで、教授は地階の客室で安静にして下さい」

言いながら客室まで連れて行き、中に押し込む。弱々しい抗議の声を完全に無視して居間に戻った。

「さて、何か言うことはあるかねサム君？」

「お前は議長か」

「では真面目に……胸中を吐き出してみ？」

ソファーに腰かけたバートに促され、サムはゆっくりと口を開く。

「外の奴ら、故郷で見た奴と同じ見た目をしてた。あれが……教授の言うJ-cysなのか……？」

「おそらく」

「さっき弾撥ね帰してたよな……？」

「ああ。9ミリの＋P弾が全く効かない。外殻のなんと堅いことよ」

「俺のレッドホークならいけるけど弾数が……」

「.44マグナム弾をどっさり持つてくるアホもいないから仕方ないわな。まあでも、一応狩猟用の散弾銃を備えてあるからどうにかなるさ」

「いやでも散弾が効くと思う？」

「スラッグ弾（散弾ではなく単発の、大型動物猟用の弾）が百発以上残ってるはずだから、そっち使おう」

「おう」

数秒の沈黙の後、バートが思い出したように言った。

「そっぴや今何時だ？」

「AM2:40。やっぱりどっちは起きてないってことで俺は寝るわ」

「急な展開に目眩がするよ。俺を更に不規則夜間生活者にする気が

貴様は」

「寝る子は育つと言うじゃないか」

「30手前の大人のどこがどう育つんだ？」

素早く姿を消すサムに混ぜ返し、バートはちらりと窓を見て銃を向けた。こちらを凝視していたJ・c・y・sは己へ向けられた銃口を見て、サムもかくやという速さで闇に引込む。ため息をつき、窓枠の上部の突起に指を掛け、下に引く。この家の窓にはどれも強化ガラスがはめられており、鉄板を降ろすこともできるように改造されているのだ。実際、このあたりは大型の野生動物が多く、強化ガラスとはいえ破られたことは一度や二度ではない。表のJ・c・y・sがその機に乗じて侵入してくると非常に厄介なことになる、と考えてのことだった。

「これで助かる……。こんな沈みかけの船からはさっさと脱出するに限る」

こつそりと部屋を抜け出たベッドトはサムが乗ってきたワゴン車に乗り込む。そして燃料計に視線を移し、目を見張った。

「残量ゼロ……だと……？ なんとという杜撰な男だ……」

慌てて車外に出、ガソリンを探す。と、

ヒタヒタヒタ……

心理的に不安になる足音が聞こえ振り返ると、中腰の人型の何かがいた。

「ば、バーソロミュー君かな？ そそそれともリーチ君か……」

一瞬だった。ほとんど予備動作なしで飛び掛かれ、片手で首を絞められたのだ。隻腕にしては信じられないような怪力で、ベッドの意識は早くも飛びそうになる。必死に腹を蹴るも全く効いてるようには見えない。霞みゆく視界の端に非常用の消火斧が映った。とつさにそちらに腕を突き出し、薄いプラスチックを破って柄を握り締める。なぜか一切反応しないJ・c・y・sの頭に渾身の力で斧を振

り下ろした。が、  
ガアアアアン

ほぼ垂直に叩き付けられたはずの刃はいとも簡単に砕け散った。そしてそれが彼の最期の抵抗になった。

「おいちよつと待ってえええ!？」

杜撰な男の声は遠く聞こえた。遅すぎる……。そう思いながら、意識は失われた。

遡ること10分前。

「あ、バート? 今どこ? っと」

『ピク。チャットがこんな形で役立つとは思わなんだ。日本のゲーム会社に感謝しなきゃな。……今、自室』

「今さつき車庫の方から不審な物音が聞こえたんだけど? っと送信」

『知らん。パ。テラのライブ放送の撮り溜めヘッドホン装着で見たから、大音量で』

「お前好きだよな、そっち系。ってか、ホントにヤバい感じなんだケド? 送信」

数分待つて音沙汰ないので直接行ってみることにした。レッドホーク片手に部屋を出る。

地階に下りると客室のドアが半開きになっているのが目に留まった。いわずもがな、ベットを放置した部屋である。小さく舌打ちし、中を覗き込んだが誰もいない。ベッドの上に灰色の小箱が乗っかっているが見えるが……

「うん、無視しよう。マズいフラグが立つかもしれないし」

次に居間に顔を出し、ため息混じりに問題の車庫に向かう。

「なんかイヤゝな空気が濃密に漂ってるんだが…… っと、何か聞こえる……?」

そつと近づきドアを開くと、自分の車の真上に開けられている穴が

目に飛び込んできた。そして車を挟んだ反対側からプラスチックが割れる音、次いで金属が砕ける音が響く。

「おいちよつと待つてえええ!？」

ベッドを片手で吊るし上げている人影を目にした瞬間、そんな声が出た。ソレはこちらの姿を認めると、ベッドを手放し中腰になった。突撃体勢。頭で考えるより早く反射的に横に跳んでいた。ギリギリ突進をかわす。ソレが対象物を見失い壁に突っ込むのを尻目に、入ってきたドアの内側に慌てて滑り込んだ。急いでドアを閉め、内鍵を掛ける。ベッドの生死はどうでもいいとしても、反撃するとかそういう考えは全く起きなかった。恐怖に完全に吞まれていた。肩で息をしながら、とりあえず近くの棚や什器をドアの前に積み、即席のバリケードを張っておく。

「知らせないと……!」

バートの元へ走り出す。が、何かに足を掬われ、空中で一回転する形で床に叩きつけられた。

「ぐっ……」

後頭部をしたたかに打ち、急速に視界が暗くなる。体に力が入らず、声も出せない。すぐに意識が闇に堕ちていった。

## 第四章（後書き）

次回予告：バートの男泣き

サムはどうなるのか？

教授は……どうでもいいや

の3本でお送りいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1756x/>

---

招かれざる客

2012年1月9日02時49分発行